ほつまつたゑ
御機の二十三

御衣定め(みはさだめ) 剣名(つるぎなのあや)の文

この文はアマテルカミが
第二代大物主のクシヒコに
人を斬るものである剣が、
何故国の宝となっているかを
質問するところから、二人の会話を
中心にまとめられています。
ツルギ(剣)は罪ある人(枯れ)に向かって
降り降ろされ、正しく生きる人に剣がいかない
ように作る哲学が記されています。その理念は
「活人剣」にも残されています。
人が驕りの気持ちを持つときに「枯れ」に
近づきますが、その驕りを立場に合った衣を
着ることで、整えていこうとする機織りの法に
ついても書かれています。

「活人剣(かつにんけん)」とは

日本の剣術における思想をまとめた『兵法家伝書(へいほうかでんしょ)』に
兵法(剣術)の理想として柳生宗矩(やぎゅうむねのり)が提唱した。
「本来忌むべき存在である武力(剣)も、一人の罪人を
殺すために用いることで、多くの民を救い『活かす』ための
筋道となる」というもので、戦国時代が終わりを迎えた際、
「太平の世において剣術」の意味する役割を説いた。
『兵法家伝書』は江戸幕府3代将軍・徳川家光のために
将軍家兵法指南役である柳生宗矩が確立した
柳生新陰流(江戸柳生)の兵法思想を記した武道書である。

天地、陰陽、宮の外も内側も平和に調和している時、
三千人の物部達が、イサワの宮で剣の拝観を許されて
いました。物部を率いる立場の大物主（クシヒコ）は
「なぜ、人を斬りヰノチを奪う剣を国の宝と称するので
しょうか」と
アマテルカミにお伺いしました。
この場で質問することで、皆がその意味を理解することが、
大事だと大物主クシヒコは考えたのでしょう。
アマテルカミは勅して
「剣の始まりは第六代天神のヲモタルの頃に造られた『天の矛』
です。実はクニトコタチ（初代天皇）の時代は矛など必要ありま
せんでした。
なぜなら民は心が素直で、法律を決めたらそれを守る人しか
居なかったからです。
心は雪のように白く、罪のない透き通っている人しかいないような
神の世は何億歳という長寿の人も居ました。
そこから時代が進み、四代目の天皇ウビチニ、スビチニの世に
なると、自分を大きく見せようとして飾る心が芽生えると、寿命が
百万年に減ってしまいました。

イサワの宮　三重県志摩市に伊雑宮（いざわのみや）の名は
残っていますが、この場所だったかは厳密には不明、伊勢神宮
の内宮か外宮を指すかもしれません。